



フロはなし

釜ヶ崎と 山谷をくら

べると、その根本のところは同じなのに、いろいろとちがった面も多いことに気がつく。フロのこともそんなちがいの一つだ。しかし、フロの話の前に、ほかのことでちがいの目立つ例をいくつか拾ってみよう。

まず釜のドヤは 高層

の鉄骨鉄筋化した個室制が主だが、山谷ではまだ不造二階建てらしいの古いスタイルが多い。

釜は小さなめし屋ばかりだ

九時をすぎ、九時半をすぎると、さあっと減って行く。パチンコ屋の閉店が十時だから、それまでがフロの時間なのだ。

朝スロへ入ってからパチンコをやったら、かならずもうかるわけじゃないが、やっぱり気分のものである。どこにも負けたあとではフロ銭も作しくなる、ということもある。

釜は天国で 山谷は地獄

というわけではなくて、釜も山谷も天国であり地獄であるのだけれど、朝スロへ入って、ちよつと暇でもうなつて、それだけの話でくらべれば、朝スロがいくらでもある釜は、山谷よりずつとマシだと言つてよさそう。

昔、映画のなかで唱われた

が、山谷には「あさひ食堂」のようなマンモス食堂があり、ほかにも「だいまる」など、一度に数十人がめしを食える店がある。

立ちのみ屋

が釜には多いけれど、山谷ではまだ少ない。ちよつと前までの山谷は、ナミタパシの角の「世界」とその少し先の「幸手屋」と、いろは通りのナントカ屋へ名前を忘れた、一番者の多い店だったと、そのくらいしか立ちのみ屋がなかった。これほみんないりゆる酒屋が立ちのみを兼ねていたので、立ちのみ専業は、屋台店を別にすれば、山谷には一軒もなかったと言える。

そして風呂、銭湯はどう

散々、ふいと一つ思い出した。しかし映画の題は思い出せない。大映の「お馬は七十七万石」というのだったような気もするけれど、多分ちがうだろう。でもとにかく、歌の文句はにしかた。

へお殿様でも 家来でも

風呂に入る時や みな裸 袴(カシミシ)ぬいで 刀をすてて

歌の一つも飛んで出る

この歌の文句は、早く

言えぬ(おそく言っても)ゴマカシだ。フロに入る時はみんな裸、平等と言うのは、フロ以外では不平等なことだ。人間がフロに入る時間はかなものだから、つまりは大

かというところ、これがまただいいちがう。

第一、釜のフロはたいてい毎日、朝から夜中までやっているが、山谷では朝スロがない。大きな釜だ。いまは不景気で夜勤なんてのもほとんどないけれど、夜勤して帰ったとき、朝スロに入れるか入れないかは、あとの一杯がうまいか、どうでもないか、よく眠れるか眠れないかに関係してくる。それから、休んだ日も、まづ朝スロでさっぱりできるのは気分がいいものだ。いま、釜の朝スロを気をつけてみると、みんな休まなまきや仕方ない雨の日なんか、ふぜんの日より客がずつと多い。そして、そのたくさん朝スロの客は、

きは不平等を、フロという小さな平等(らしい)ことにスリカ工ているのだ。

けれどもまあ、そのことをキチンとわかった上で、フロはフロとしてへまったくさやかな、つかの間のいい気分になれる場所である事実は消してしまえない。

飯場の風呂、あるいは飯

場の近くにある銭湯で、いつも感傷つてるオヤジやボーシンの持ちものへぶらさがりものの、子方の誼よりもちよつとほけさぬ相で、はすかしそうなのを眺めたときなんか、フロはなかなかいいなと思う。そんなちよつとしたことから、威張り屋のオヤジやボーシンに対して、五分にわたり合うまくかけが生れることもある。